

どの生徒にも必ずある成長

卒業式が終わりました。やはり、生徒の言葉ほど感動的なものはありません。心の叫びというのでしようか。「やりたい」「行きたい」「歌いたい」という熱い思いをもちながら、我慢して努力を積み重ねてきた生徒たちの言葉には、表現が適切かどうかかわかりませんが「迫力」がありました。やはり当事者たちだからこそ、絞り出せるものだと私は思います。

以前、受験のために関西へ一人でいった生徒のことを書きました。その彼が昨日校長室にやってきて、手紙を渡してくれました。私に書いてくれたということは、「お世話になり、ありがとうございました。私がほっときました」的な内容かと思いきや、書いてあるのは自分のことがほとんど。でも、私は涙が出そうになりました。そこには、礼の言葉よりも深く深く感動する内容が綴られています。たのです。これもまた、「迫力」のある言葉でした。

「校長先生、三年間ありがとうございました。」
中一の時、学校にあまり行ってませんでした。学校に行ったとしても十二時や一時に行っていました。中二から少しずつ学校に行くようになり、車で行っていました。中三になってから学校まで歩くことになりました。最初は、足などがすぐに痛くなってしまいました。しかも、歩くスピードも遅くて全然だめでした。ですが、最近になってやっと普通の歩くスピードになりました。

卒業しても、歩くスピードを上げたいです。」

文面からわかる彼の成長は、学校に毎日登校できるようになったこと、自分の脚で登校できるようになったことです。そんなことは当たり前と思う人もいるかもしれませんが、これが彼の中学時代です。過去の自分を乗り越えて作り出した新しい自分が成長の証（あかし）なのです。

自分の脚で登校できるようになった今年度、私は彼の成長に立ち会える場面がたくさんありました。坂の途中で息が切れ、休憩をとりながら上ってくる姿。登校するだけで大変なのに、すれ違う地域の方に深々と頭を下げている姿。照れながら私よりも先に「おはよう」を口から発する姿。

毎日どれだけ身長が伸びたか自覚できないのと同じように、一日の成長も微々たるものでわからないものです。しかし、どの生徒にも必ずあるのが成長です。皆と同じように成長できたかどうかということよりも、その生徒にどんな成長が生まれたのかを大切にしたい、その成長を確実に認められる北中でありたいと私は思います。

（三月五日 記）

